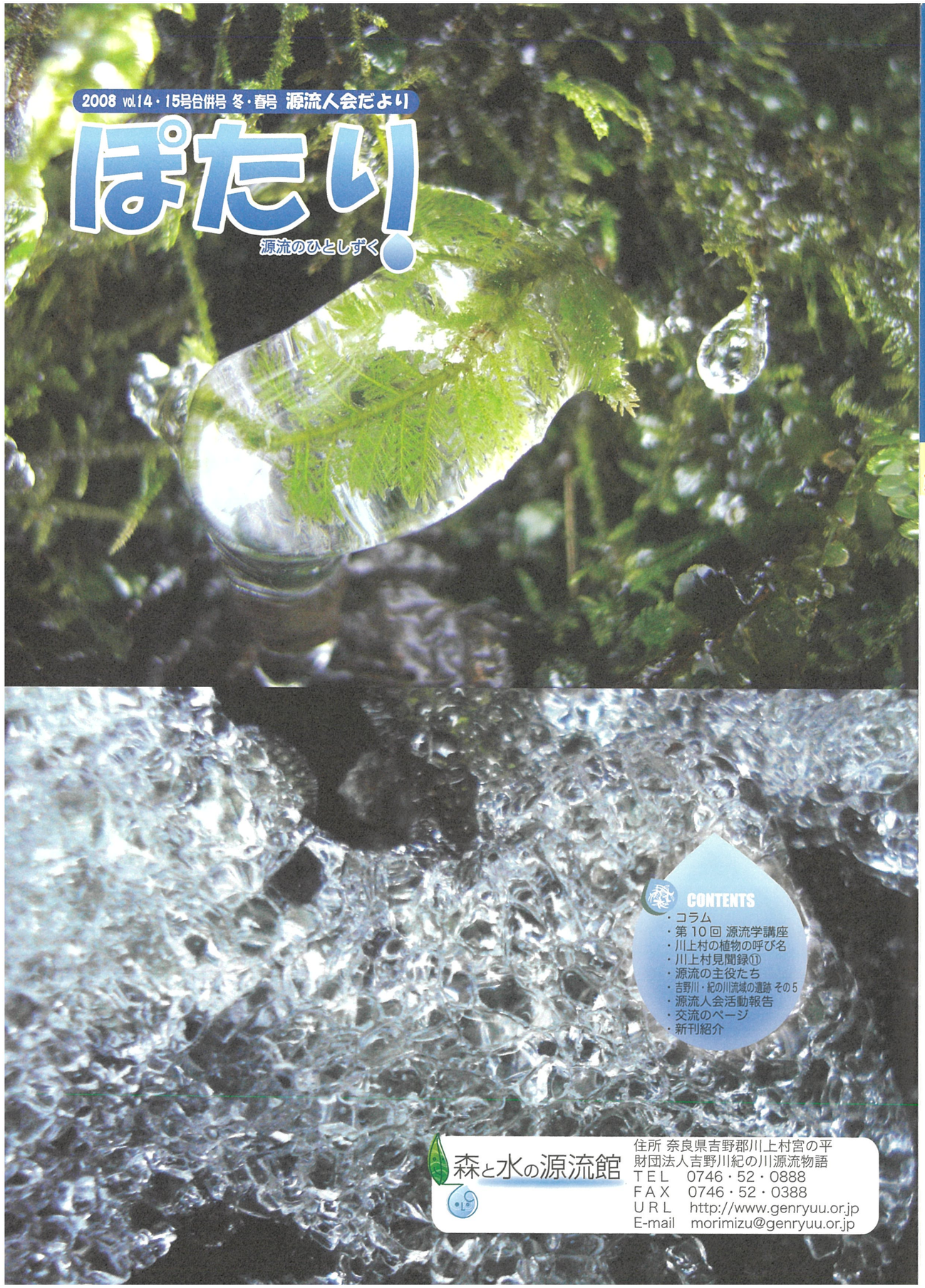
2008 vol.14・15号合併号 冬・春号 源流人会だより

ぽたり!

源流のひとしずく



ぽたり
源流のひとしずく
冬・春
第14・15号

ぽたり 源流のひとしずく 第14・15号合併号 発行日■平成20年2月発行
発行所■財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館 TEL 0746・52・0888

CONTENTS

・コラム
・第10回 源流学講座
・川上村の植物の呼び名
・川上村見聞録⑪
・源流の主役たち
・吉野川・紀の川流域の遺跡 その5
・源流人会活動報告
・交流のページ
・新刊紹介

森と水の源流館
住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL http://www.genryuu.or.jp
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

（続き）

お花の方は尾上さんに。ちょうどこの日はコアジサイが見頃。他にもオカタツナミソウ、サワギク、イナモリソウ、ツルアリドオシ、ミズタビラコなどが見頃でした。マツカゼソウ、クロモジ、アブラチャンなどにおいのする植物をいろいろ紹介してもらいました。においがすると言えば、とコケの方からはカビゴケを紹介。環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧I類に指定されている希少種ですが、ここにはたくさんあります。水道のパイプにたくさん着生しているのを少しさわると、私的にはいいにおいがします。皆さんの反応で多かったのは「薬のにおい」。薬って何の薬だろう??

このルートはお昼で切り上げて、お昼からは蜻蛉の滝のまわりで観察。危ない植物の代表、ヤマウルシなどなどを教えてもらいながら、綛谷さんがシダを中心に解説。最後は標本の作り方で締めました。参加人数が少なめだったので、ほとんど直接指導に近い形でいろいろな植物を楽しめて良い1日でした。

新書紹介

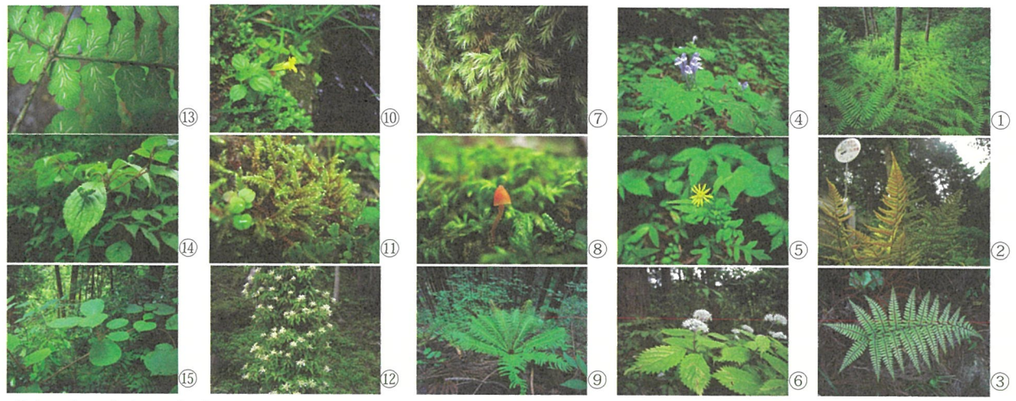
「川上村昔ばなし」

奈良県川上村広報「かわかみ」編集委員会編著

定価：300円

吉野川源流の村、川上村も昔から比べれば、暮らしぶりもどんどん変わりました。口伝えで伝承されてきた昔ばなしもどんどん伝わりにくくなってきています。本書は「広報かわかみ」で4年間にわたり地元集落に残された昔ばなしを発掘し、記録していった者の総集編で、26大字の昔ばなしが収録されています。語り手は100名以上を数え、挿絵は川上村の小学生が担当しています。河童のガタロウ、土倉庄三郎さんの話しなどおなじみのお話も収録されています。森と水の源流館のミュージアムショップでもあつかっています。是非お求めください。

〈当日見られた植物〉



①ウラジロ ②ベニシダ ③タニイヌワラビ ④オカタツナミソウ ⑤サワギク ⑥コアジサイ ⑦オオシラガゴケ ⑧ミズゴケノハナのなかま？
⑨シシガシラ ⑩ミゾホオズキ ⑪エゾハイゴケ ⑫イワガラミ ⑬キヨタキシダ ⑭ハナイカダ ⑮キウイ（順不同）

交流のページ

「自然林と鹿の食生との調査」に参加して　山野隆司

一昨年度より会員となり、何度か主催される行事に参加してきました。6月2日（土）～3日（日）にかけて「水源地の森」の調査員として妻と一緒に参加させて頂きました。「自然林と鹿の食生との調査」としてこの森の6箇所に囲いを設けられ、その内外の植生調査を行って、基礎データー収集する目的で行われましたが、良き経験ができたと思っております。

一日目は天候に恵まれ3箇所の調査を行いました。明らかに囲いを設けた中（鹿が入れない）と外部では一見するだけで植物の芽生えに差が見られ、鹿がこの自然林の植生に影響をしていることが見られました。今後、データーを積み重ねることによって、更に多くの事が解明されると思います。

二日目の午前中はあいにくの雨となり、厳しい条件（雨とヒルの攻撃・・）での調査となりましたが、予定の調査を終える事ができました。終了時には雨も上がり、新緑の美しい天然林に身を置くことができました。日常でコンピューターを教えている私にとって、「PCの世界の時間」の流れの速さは驚異的で、その流れに乗り遅れないようにする自分の姿があります。その速さ故に、自分を見失う感覚を受ける時があります。でも今回自然林の中に2日間も過ごすと、「木々の世界の時間」を体の中を通り抜けてゆく感覚を受けました。静かで、さわやかな時間の流れでした。

松尾芭蕉は「月日は百代の過客にして、行きかう人も旅人なり・・」と「奥の細道」を書き出しています。人は、「人の世界の時間」を越える時、新たな境地へ逸脱できるものかもしれませんね。今度は、あなたも、その境地の扉をたたいてみませんか？

（右上）下層植生を調査しているところです。
（右下）林床は下草が見当たらず、木々の葉っぱもシカが食べられる範囲にはありません。
（左上）下草として残っているものはバイケイソウなどの毒草がほとんどです。
（左下）今年も防鹿柵の中にはたくさんの草や稚樹が確認されました。

源流人募集！

源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育てゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費	
個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,500円
団体	10,000円

郵便振替　00940-1-331163

募金は次のような活動にあてられます

- 吉野川・紀の川の水について学ぶ副読本を作成し、流域の小学4年生に配布
- 「源流学の森づくり」事業
- 「水源地の森」の保全を呼びかけるための啓発用看板の製作と設置

郵便振替

00950-2-331164　「水源地の森守募金」あて

改めて源流の役割を認識した一年だった。

平成20年初頭に当たり、今までを振り返って考えてみました。

大滝ダム完成後の村がどのようにして生きて行けるのか？

「ダムができて栄えた村はない。」への挑戦を、どのように進めて行けば良いのか、の思いから始まった「水源地の村づくり」。

平成8年8月「川上宣言」を発信してから、その宣言文の具現化に取り組んできました。そして、平成11年から4年をかけて伐採の進む原生林を購入。その森の保全と「水源地の村づくり」を進めるための拠点施設である森と水の源流館を平成14年にオープンし、まもなく6年が過ぎようとしています。

日々新たな出会いや懐かしい出会いが起きていますが、昨年改めて源流の役割を感じた出会い（再会）がありました。少し、その話を・・・。

水源地の村づくりを進める精神的な支えとなっているのが「川上宣言」であり、その前後に出会った人たちです。早稲田大学教授の宮口侗廸教授とは、当時国土庁にいた冨永さんとの縁でつながりが始まり、財団法人吉野川紀の川源流物語の評議員に就任いただいています。昨年の3月、評議員会に参加の際に村の若手職員と交流していただきましたが、教授の存在感や話す言葉の端々に大切なものを感じ取ってくれたのではと思っています。

9月7日から9日に亘って静岡県川根本町で開催された「上流文化圏会議」に参加しました。川の上流に息づく暮らし方や知恵、次代に繋ぐべき伝統文化や民俗を守っていこうと山梨県早川町が中心に取り組んでいます。そこに共感して集まる人たちやそこに暮らす人たちとの交流は、地域は違うけれど心通ずるものがありました。

一昨年から、吉野川・紀の川流域の連携に対しアドバイスを受けてきた、松村紅実子さんと議会の研修先で9月に再会。大分の流域連携を一緒に取り組んでいる木下さんを紹介いただきました。

▲ 四万十川の清流

▲ 松村 紅実子さん
（国土交通省 水源地域対策アドバイザー／河川愛護モニター）

源流人会活動報告

5月19日（土）

この日は1日杉本充さん（国土緑化推進機構 平成14年度森の名手・名人百人）をゲスト講師に迎え、間伐体験を行いました。辻谷館長と杉本充さん、ともに林業のスペシャリスト！まずは安全について注意を受けたあと、実技へ。伐採する木は樹齢40年ほどの見た感じはたよりない、ひょろっとしたスギやヒノキなのですが、これでも「頭の上に落ちてきたらバットよりも太いんで」とやはり何よりも安全が大事というのがプロ中のプロなのでしょうね。当日教えてもらったことを紹介してみたいと思います。

さて、最初に教えてもらったのが、「縄上げ」。この作業の第一関門が「もやい結び」という縄を木にわっか状に結ぶ結び方（図1）。木を切る前から大苦戦です。縄を巻いたらわっかを木の上の方まで上げていきます。これがまた、上がらず大苦戦。苦戦の末に縄を上まで上げたらやっと間伐の準備の第1段階終了です。

さて第2段階。今度は「ウケ」を作ります。倒す方向を決めて、ヨキでくさび形に切り込みを入れます。このウケを上手に仕上げないと、木が思った方向に倒れません。大きな価値の高い木とかだと、ちょっとの狂いで商品価値を下げてしまったり・・・。林業ってほんとに熟練の技の連続だと思います。

やっと最終段階。ウケの反対側からのこぎりを入れます（図2）。伐り進むとやっと講師から「引けー！」の合図。倒す側に張ってあったロープもみんなで安全なところから「よいしょよいしょ」と引っ張ります。すると目の前でスローモーションのように倒れていく吉野材！「バッサーン!!」と倒れます（図3）。

倒れた木を取り囲み、今度は「皮むき」。杉本さんお手製のアオキで作った皮むきを使ってみんなで皮をはいでいきます（図4）。この時期は雨が多く、吸い上げた水が木の皮の下をたくさん通っているので簡単に皮がむけるのです。すると白くてきれいな何ともいえない木肌（図5）が登場。なめるとほんのり甘い味が。吉野材では梅雨時期に山側に枝葉を付けたまま皮をむいて木を倒しておきます。そうしておくと葉からの蒸散とあわせて木が乾燥していきやすいのだそうです。知恵だなぁと思います。

お昼ごはんをはさんで、今度はヒノキの皮を使った入れ物作り。皮むきのケース作りを杉本さんに教わりました。よくなめした（図6）杉の皮にヨキでちょいちょいと切り込みを入れて（山の中ではどんな場面でもヨキは大活躍ですよね：図7）編みこんでいくとあっという間に完成（図8）。

ところが、さぁこれから午後の間伐をしようかというところであいにくの雨。「まぁこんなときはのんびり話でも」ということで小屋で杉本さんを囲んで山の話で盛り上がりお開きとなりました。

▲ 図1

▲ 図3

▲ 図2

▲ 図4

▲ 図5

▲ 図7

▲ 図6

▲ 図8

5月20日（日）

曇ったり、小雨が降ったりでやや天候が悪かったですが、この日は小屋の風呂と台所づくりを行いました。風呂はドラム缶で作ります。しばらく放置されていたドラム缶の中はサビでぼろぼろ。これをこそぎ落とすのも一苦労です。それにしても、風呂と台所づくりはさながら増改築！カベをとんちんかんとかしているとあっという間にお昼。この日のお昼は（も）辻谷館長の茶がゆとおつけもの、その他いろいろ。ものすごい量があったような気がしましたが、運動後は食事が進みます。何とか完食。

食事の片付けをして、作業の続きをちょっとしたらあっという間にお時間となってしまいました。

▲ ほとんど増改築です

▲ 達っちゃんの作ったおいしい茶がゆ♪

▲ 楽しい茶がゆパーティー

6月7日（土）源流塾「植物観察」

今年2回目の源流塾は、植物がテーマ。講師に水源地の森の植物調査でお世話になった尾上聖子さん（奈良植物研究会会員）、綛谷文清さん（奈良シダの会会員）を迎え、木村がコケ植物を担当し、コケ、シダ、草本植物を観察していきました。

蜻蛉の滝上の林道終点から、爺坂婆坂（じいさかばあさか）に続く登山道でいざ観察開始と思いきや、車を降りた瞬間から観察はスタートです。綛谷（かせたに）さんは日本各地のシダ植物を隅々まで調べていらっしゃって、特に奈良県のシダ植物には詳しい方で、「日本のシダ植物（http://homepage2.nifty.com/fern/）」というシダ屋さんなら必ず知っているというサイトを立ち上げておられます。まずはシダの葉っぱの説明。シダは1つの植物で葉っぱ1枚と数えます。そんな初歩的なことから始まっていきます。そして、一歩歩くごとにどんどんシダの名前を挙げていきます。

まず目についたのはウラジロ。お正月の縁起物でおなじみですが、何で縁起物なのか、知っているようで知らないものです。そんなことも教えてもらいつつ、やはり出てくるベニシダ。葉の裏に真っ赤なソーラス（胞子嚢群）がたくさんついています。山に行くと一番普通にあるのに、変異が大きくなかなか同定できない厄介者です。シダ屋さんの格言には「シダはベニシダに始まり、ベニシダに終わる」というものまであるほどです。私のような素人は調査の時でも「あ、ベニシダだ！」と即決してしまうのですが、シダ屋さんに見せると「うーん・ベニシダのようだが・・・」とうなる場面がしょっちゅうあります。さて、こいつはどうなんだろうと思いながら見ていたのですが、そのまんまベニシダでした。ちょっと残念。

12ページへ続く←

10月にジャイカの事業で、東チモールの水道関係者が、森と水の源流館を訪れてくれました。2日後、北タイを支援しているNGOの皆さんとタイの若者達とが来てくれました。なぜ、今、東南アジアから視察、と考えましたが、やはりこれを繋いでくれた人との関係がありました。後に、北タイのNGOの皆さんと一緒に活動していた人と5年前から繋がっていたことが分かりました。

第8回の源流シンポジウムが宮崎県と熊本県で開催され、参加。以前山梨県小菅村でのシンポジウムのときに「源流は海や!!」と言った漁師（?）に再会。その言葉は今でも残っています。

多くの地方、地域に出かける機会を与えてもらっていますが、すばらしい、情熱を持った人たちがいることに感動です。

自分も以前「熱い人」と見られていたことがあり、だから多くの応援団（?）が声援を送ってくれていたことを思い出しました。

11月に首都圏の利根川、荒川、多摩川をネットする大石氏と再会。2002年第1回荒川水フォーラムに大石氏から声を掛けられ、森と水の源流館の活動や全国川上の事例発表したのがきっかけで、「すごい人がいるな」と感じた人ですが、今は、より大きな活動の枠組みを考えているようでした。

四万十市で開催の地域づくり大会に参加。念願の四万十川の水に触れ、幻の魚「アカメ」も見ることができました。そして地域づくり表彰にノミネートされ、その審査会では、自分たちの取り組みをプレゼンテーションする人たちの熱気に触れ、楽しく見ることができました。その一つに熊本県の旧清和村「文楽の里」の取組みがありましたが、十数年前になるでしょうか、「文楽の里」を案内してもらったことを思い出し懐かしく話をさせてもらいました。何事にも継続して取り組むまじめな姿勢には敬意を表します。

このような出会いは、血流を激しくさせてくれます。いずれの出会いも詳しく書けば、とても紙面が足りません。一期一会も大切な出会いですが、何度もの再会は「何かをしろ!」と言われているようでより考えさせます。

上流、源流をもっと強く意識し、世に問う必要と役割を果たすように言ってくれているのかも知れません。

森と水の源流館を設立したときのことを思いだし、強く使命感を意識させられた出会いでした。

事務局長　坂口　泰一

▲　お返しに東チモール民芸品をいただきました

▲　東チモールの水道関係者は森と水の源流館入館９万人目となり、坂口事務局長らより記念の賞状と記念品が渡されました

▲　北タイを支援しているNGOの皆さんとタイの若者達と

吉野川・紀の川流域の遺跡～その5～

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

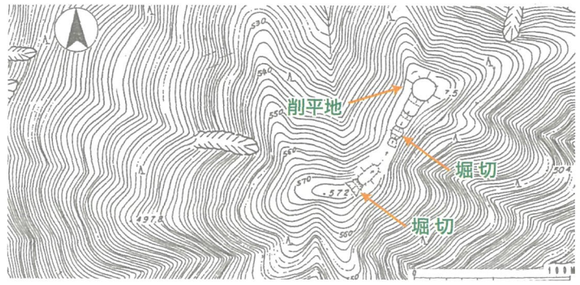
川上村の歴史と関係が深い遺跡　川上城跡

今回は吉野川流域から離れたところにある、川上村の歴史と関係が深い遺跡を紹介します。

明徳三年（1392年）の南北朝合一後も、室町幕府とかつての南朝方の間に長期に亘る争いがありました。その南朝方の活動は「後南朝」と呼ばれています。川上村は後南朝の拠点であったため、川上村とその周辺には後南朝の遺品や伝承・史跡が数多く残されています。しかし川上村周辺が確実な史料上に現れるのは後南朝の終盤頃で、それ以前の状況はよく分かっていません。一方、後南朝方の北畠氏と室町幕府との戦いがあった三重県側では、残された史料から初期の後南朝の活動をある程度把握することができます。

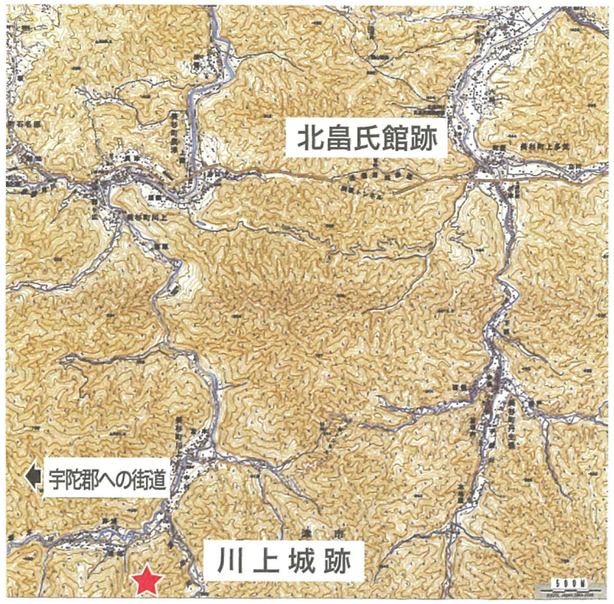
この北畠氏とは後醍醐天皇に仕え『神皇正統記』を記した北畠親房以来、南朝を支えてきた一族です。特に親房の三男、顕能が伊勢国司に任命されてから、伊勢国（現在の三重県の大部分）に勢力を広げ、南朝を支えていました。そして、三代目の伊勢国司であった後亀山天皇代目の北畠満雅は、後亀山天皇（南朝最後の天皇）の皇子小倉宮と共に３度も室町幕府と戦いを交えるなど、後南朝と深く関っていました。

今回紹介する川上城跡は、室町幕府側の史料と遺構から後南朝関係の遺跡として確認できた数少ない例です。



▲「川上城跡」

川上城跡は、奈良県と三重県の県境にある三重県津市美杉町川上地区に所在します。尾根を切断した堀切といくつかの削平地が見られるだけの小規模な城跡ですが、北畠満雅が最初に室町幕府と戦った際、応永二二年六月十七日（1415年）に室町幕府軍により攻め落とされたことが室町幕府側の史料『満済准后日記』に記されています。北畠氏は川上城が陥落してからまもなく室町幕府と和議を結び、小倉宮もしばらく経ってから京都に戻っています。川上地区は北畠氏の本拠地が置かれた多気地区の背後にあり、宇陀郡に向かう街道が通っているため、北畠氏にとって宇陀郡や吉野郡・京都方面への連絡路を維持する上でも重要な城であったからでしょう。そして、この城が陥落したことで抵抗を諦めざるを得なかったともいえます。



▲　川上城跡周辺図

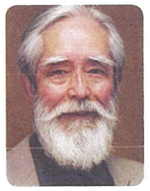
このように当時の史料から城の時期や築城者・経歴が判明するものは極めて少なく、そしてなにより数少ない確実な後南朝の遺跡としても価値が高いものです。標高はそれほどではありませんが、登山道などは整備されていません。もし行かれるのでしたら充分ご注意ください。

参考文献
竹田憲治・成瀬匡章「川上城跡の調査」『伊勢の中世』19号 1999 伊勢中世史研究会

川上村・吉野川源流の自然を紹介するページです。

第5回 源流の主役たち

吉野川源流のナガレタゴガエル（その2）



井手 泉
（☆通称 ヒゲじい：奈良教育大学附属自然環境教育センター協力研究員・源流人会会員）

前回に続いて、今回もナガレタゴガエルに登場してもらいます。そんなカエルは初耳だという人は、できれば前号もお読みください。ナガレタゴガエルは1990年にアカガエル科の新種として記載され、日本ばかりでなく世界的に見ても珍しい、真の渓流性のアカガエルとされています（前田・松井 1999）。このカエルは、関東から近畿にかけての山地に局所的に分布し、吉野川水系では2008年までに5地点で生息が確認されています。体長約40-60mmでメスの方が大きくなります。目立たないカエルですが、さいわい源流の森にも生息していますので、皆さんも谷川や山路で気をつけていれば、きっとこのカエルに会えると思います。今回は、前号で紹介できなかった産卵の様子や、春から秋にかけてのいくつかの場面を紹介したいと思います。

●産卵の様子

ナガレタゴガエルの産卵は、吉野川では2月の初頭から始まります。まず冬眠からさめたオスは、メスより一足先に流れの緩やかな比較的深い水底に集まり、低い小さな声でグググッと鳴き合い、縄張りをつくらずにメスが来るのを待ち受けます（写真1）。

▲ 写真1
メスを待つ繁殖期のオスたち

しばらくしてこの繁殖サイトにメスが現れると、近くのオスがたちまち飛びついて、メスの背後から素早く抱接します（写真2）。このとき、他のオスも抱きつきメスの奪い合いとなり、数匹が絡まることがあります。ともかく抱接に成功したカップルは安全な場所へ移り、十分に吟味して良い産卵場所を見つけてから産卵します。メスはオスに促され、白い卵が大体50-150個前後ブドウの房状に集まった卵塊を、通常は石の腹面や側面に産みつけます（写真3）。産卵と同時にオスが放精し体外受精が行われた後、抱接が解かれます。

▲ 写真2
抱接の様子

▲ 写真3
産卵の様子

●産卵後のメスとオス

メスは産卵して抱接がとかれると直ちにサイトを離れ、石の下や隙間に隠れてしまいます。さもないと、他のオスにすぐに抱接され、セクハラで消耗して死ぬ危険があります。そうなると、難儀なことにそのオスは死体を抱いたまま、繁殖できずに終わることにもなりかねません。一方、オスは放精後もサイトに居残って、次のメスを待ちます（写真4）。

▲ 写真4
サイトに居残るオス

●繁殖期の終わりと春眠

上記の一連の行動が見られるピークの期間は意外に短く、一定のエリアでは暖かい日に集中的に産卵が行われ、翌日からほとんど見られなくなることがしばしばあります。とはいえ、全般的には2月末頃まではオスの姿が処々で散見され、そしてやがて1匹もいなくなります。繁殖後に死ぬ個体が多いことと、生き残ったものはすべて水底の石の下などにもぐって休眠（春眠）するためです。

▲ 写真5
春眠中の様子

春眠中のナガレタゴガエルは、それまでブヨブヨに伸びていた皮膚が縮んでスマートな体形になりますが、基本的には皮膚呼吸しながら、石の下や隙間にもぐってじっとしています（写真5）。

源流学講座

川上生まれ川上育ちの達っちゃん（辻谷達雄館長）は、50年以上の山仕事のベテラン。その長い人生の経験から、自然とともに生きる力や知恵などを笑いのエッセンスを加えてお届けします。

第十回 山小屋づくり

山小屋づくりの最後になった風呂場を作ることにした。普通、一般的な家の建築では風呂場づくりは大工、左官、建具と三人の職人さんが関わるのである。素人の分際で大変なことは分かっていたが、自分で作ることにした。

例によって設計図は自分の頭の中にあるので他人には、一切分からない。従ってブツブツと独り言が長くなる。中でも一番多く出る言葉に「コオツト」と言うブツブツがある。これは川上村の方言で、物事を考えているときによく出る、いわゆる思案語である。今回の風呂場づくりでは数え切れないほど「コオツト」が出たものと思う。

さて、風呂場の位置である。現代の建築では、風呂便所は同じ棟の中に造られているが、昔の家では風呂便所は、ほとんど別棟に建てられていた。ちなみに我が家は今も別棟である。子どもの時分には暗くなると便所に行くのが怖かったのと冬は寒かったのはよく覚えている。そこで、「源流のやど」の風呂は小屋の中から行けるよう、外壁の一部をぶち抜いて、扉を一枚取り付けて、そこを風呂の出入口とすることに決めた「コオツト」。

屋根は小屋の山側のたてぐ梁にタルキ受けを取り付けて片屋根とし、4mのタルキを渡す。カワヤ（便所）の前の空き地を利用し、丸木の柱を建て、小舞はこれも丸木の6mを5本使ったので、かなり大きな建物になった。風呂場はその中の一角だけなので空間はテーブルを置いて食堂兼炊事場にすることにした。

風呂釜は普通は五右衛門風呂といって鉄でできている。昔の五右衛門風呂は底が鉄製で、その上に高野槙で作った風呂桶を据え付けたものである。湯は薪で沸かすので、槙の木の香りと、まったりとした湯加減で、なんとも言えない味があった。もう一度槙風呂に入ってみたいものである。ガスや石油電気などで沸かした湯は、なんとも味気のない入浴である。今回の四之公（源流学の森をこう言うことにした）の風呂は昔ながらに薪で沸かすので楽しみである。現在川上村でも、薪で風呂を沸かしている家は数えるほどしかないと思う。ちなみに我が家の風呂はハイテクである。

早速源流人会の人たちに参加してもらい、外壁を張ってもらったり、水道の工事等もやってもらう。風呂釜はドラム缶（森と水のワークショップで使ったもの）を据え付けることにしたので、ドラム缶の中もきれいに洗ってもらう。後は自分の頭の中の設計図を引き出しながら作業を進めることにした。

まず、風呂釜を据え付ける場所と窯の高さと焚き口の位置を決める。基準となるのが小屋の床の高さである。そこを基点に割り出していく。風呂の洗い場は小屋の床の高さと同じにする。次に洗い場から風呂釜を据え付ける高さを決める。子どもがまたげる高さ45cmが窯の一番上になる。ドラム缶の高さが90cmであるので、洗い場の床から45cm下がった所が焚き口の上になる。そこが釜の底になるので、火力を計算して、焚き口の底は釜の底から35—40cm下がった所に決めた。ここからが大変。かまどの場所を掘り下げる。60cmぐらい掘り下げた。間口1m、奥行き1・20mぐらいの土を取りのぞく。次は砂とセメントでモルタル作り。ブロックを二段積んで、コの字型の焚き口を作る。その上にドラム缶を置いて、周囲をモルタルで固め、風呂釜は出来上がった。

▲ 図1. さながら増改築？？

▲ 図2. 地面を掘って焚き口を作っています

▲ 図3. 焚き口完成！

▲ 図4. ドラム缶風呂です

▲ 図5. 床を張っていきます

大事なことは排水である。洗い場の排水と風呂釜の排水との二ヶ所をうまく水が外に抜け出るようパイプを取り付けた。水道はすでに完成していたのでテストをしてみた。両方ともOKであった。次は洗い場の床張りをする。まず、根太を入れ上に五分板を張る。洗い湯が下に落ちるように直径21mmの穴をインパクトのドリルで数十ヶ所開ける。昔の山小屋の風呂であればこれで充分入れるが、「源流のやど」の風呂はそれではあんまりなので、壁を張ることにした。外壁は浪板で張って内側は三分の（厚さの）杉板で張る。ついでに天井も張った。

一流の風呂場になったと思いきや、一番難しい入口の扉と窓が残っていた。入口の扉はビニールの浪板を張ったので明るかったが風呂の中がうつるとクレームが付いたので外側に白い布の暖簾を取り付ける。布には温泉マークの「クラゲの逆立ち」をピンク色で描いた（図10）。何よりも、この扉でのグッドアイデアは、由恵ちゃんお薦めの鹿の角の取っ手である。

▲ 図7. えぇ眺めやなにゃ～

▲ 図8. 捕まっているわけではありません・・

▲ 図9. これが無双窓

▲ 図10. クラゲの逆立ち？

▲ 図6. 一番風呂!!

この風呂場で一番考えたのは窓である。今までは左脳で考えてきたので、窓は右脳で考えてみた。さっと閃いたのはテレビのチャンバラドラマの「水戸黄門」の中によく出てくる由美かおるさんの入浴シーンのあの風呂場の窓であった。しかし、最初は建具の名前さえ分からず、大工さんに聞いても「知らん」とのことだったので、名前が分かるまでは由美かおるの窓と呼んでいた。ハハハ・・・。建具の形は分かっていたが、構造を知るのに大和郡山市にある奈良県立民俗博物館へ行ってみた。思ったとおり水車小屋の窓が正しく由美かおるの窓であった。構造は右脳にしっかりとたたき込んだ。早速忘れない中に作ってみた。うまくできたので取り付けてみた（写真7～9）。結局、広辞苑で調べて分かったことだが、名前は無双連子、取り付けたものを無双窓という。「無双連子、板連子を造り付けた内側に同型のもう一枚の連子の引き戸を設けたもの。一方に引けば一面の板張りのようになり、他方に引けば普通の連子に見える」とあるが、難しいことはさておき、自分が思っていたとおりできたので、まずは上々。早速沸かして入ることにした。

「初風呂をすると中風という病にかからん」と昔から言われている。また、「初風呂は家の旦那か隣の阿呆か」とも言われている。そんなことはどうでもよいが、まずは、私の入浴シーンをご披露することとあいなった（図6）。山猿ではありません。餌を与えないでください。ハハハ・・・。

無双窓を開けて湯船、いや湯缶から見える外の景色は格別で心の底から癒される。皆さんも是非、四之公温泉に入りに来てください。

いい湯だな、アハハン♪
いい湯だな、アハハン♪
四之公温泉は、昇天の湯だよ♪

～風邪引くなよ～

源流学講座も数えて10回目を迎えまして、山小屋「源流のやど」もどうにか完成しました。山小屋づくりには源流人会の皆様を始め大勢の皆様方のご協力を賜り誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。今後は「和歌山市民の森づくり」始め「源流学の森づくり」などの基地として大いに活用していただければ深甚です。長い間とりとめのない源流学講座でありましたが、ご高覧ありがとうございました。

●春眠あけから秋までの様子

上記のように寒い間は休眠していますが、だんだんと季候が暖かくなると時々水面へ浮上し、肺呼吸をしてはまた水底にもぐる、こんな動きが頻繁になり、徐々に春眠からさめてゆきます。そして、4月中旬～下旬の暖かい雨の日などに、一斉に上陸する傾向があります。現地での観察事例は少ないのですが、水槽での観察結果を併せ考えるとうなずけます。その頃から初夏にかけて、山路や林床で見かける彼らは、とても痩せていて体力も弱っています（写真6）。それでも生き延びて夏の間に十分に餌を食べることができたものは、立派な体つきをしています（写真7）。そして晩秋には再び渓流に移動して冬を越します。

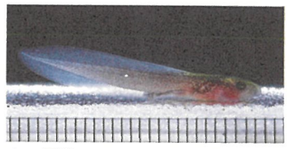
▲ 写真6
春眠あけのオス

▲ 写真7
10月頃のメス

●卵の発生ー孵化ー変態ー上陸

2月上旬～中旬に石などに産みつけられた卵は、その直後から急速に発生がすすみ、3月の中旬頃には孵化が始まります。孵化した幼生（オタマジャクシ）は白っぽい色をしており、腹部に多量の卵黄をたくわえています（写真8）。幼生はすぐに小石の下などにもぐり姿を見せなくなるため、そこで何を食べているのかわかりませんが、基本的には持ち前の卵黄を消費して成長します。成長した幼生は口が大きく、体は青褐色を帯びています（写真9）。そして後肢（後ろ足）と前肢（前足）が生えそろい、尾が短くなると、孵化から2ヶ月余り経った6月頃、変態して幼体になります。つまり、カエルの赤ちゃんの誕生です（写真10）。

▲ 写真8
孵化の様子



▲ 写真9
成長した幼生（体長約26mm）

変態直後のカエルの体長は8mm前後で、石や落葉の下などに潜んでいるので目につきにくいです。やがて餌をとるようになるためか、7月には源流の森の谷沿いでも沢山のチビガエルが飛び跳ねるようになります（写真11）。その頃は特に足もとに気をつけて踏みつけないように歩いてください。彼らも夏の間に小さな虫を食べて成長し、秋には体長22mm前後になります（写真12）。そして、陸地の落葉にもぐって冬を越します。

▲ 写真10
変態直後の幼体（体長約8mm）

▲ 写真11
7月上旬の幼体

▲ 写真12
10月頃の幼体（体長約22mm）

●おわりに

2回にわたり、ナガレタゴガエルについて吉野川での周年経過をかいつまんで紹介しましたが、このカエルに少し親しみを感じていただけたでしょうか。本種は、外見は普通のタゴガエルに似ており、同所的に生息していることもありますが、生態的に特異で、清冽な流れと豊かな森に恵まれた環境でしか生きられない、とてもユニークなカエルなのです。

さて、これを機に、源流の森の他の様々な生きものにも注目してみてください。彼らはそれぞれが独自の仕方で生きており、それらの相互作用の微妙なバランスで森の秩序が支えられています。同時にもろもろの生きものたちは、森という大きな生命につながることによって存在しています。そのことに気づいていただき、その神秘と美しさを全身で感じていただけることを願っています。

「川上村の植物の呼び名」

辻谷 達雄

名を知るということは、そのものに親しむ第一歩である。人間同士でもお互いの交友はまず相手の名を知ることから始まる。植物に親しむには、まずその名を知らなくてはならない。どんな植物にも名が付けられている。今日では、名のない植物などほとんどない。しかし、我々が、日常生活の中で目に触れる植物はそれほど多くはない。その植物の名を知ろうと努力さえすれば憶えられる範囲である。早い話が一日一つずつ憶えると一年で三六五種、十年で三六五〇種憶えられる勘定になる。とはいえ、普通の人なら三〇〇―五〇〇種も知っておけばたいしたものである。

さて、植物の名は地方地方によって違っているし、同じ川上村の中でもいろいろな呼び名がある。これらは方言として取り扱われている。図鑑などに載っている名を学名だと思っている人も多いようであるが、これは学名ではなく普遍性のある標準語（標準和名）に過ぎないもので、決して絶対的なものではない。私は和名と方言名に区別して呼んでいる。そこで、昔から呼んでいる方言名、特に川上村の東部地域の呼び名と標準的な呼称（標準和名）とに分けて、樹木を中心に調べてみた（表）。まだ一部だと思われるので時間をかけて今後につなげたい。

▲ イモギ

▲ ムラダチ

▲ カワキ

▲ コオバチ

▲ アカベ

▲ トロロ

▲ コウノハナ

▲ チシャ

▲ キュウリバ

標準和名	川上村の呼び名
アオキ	アオキバ
アカメガシワ	アカベ
アセビ	ハクワズ
アブラチャン	ムラダチ
アベマキ	ワタボウソ
イチイ	アララギ
イヌガヤ	ベベ
エゴノキ	チシャ
ガマズミ	ジブレン
コシアブラ	イモギ
コナラ	ホウソ
サワグルミ	ノブ、ゲタギ
シオジ	コオバチ
シキミ	コウノハナ、シキビ
ソヨゴ	フクランショウ
トガサワラ	カワキ
ヌルデ	フシノキ
ノリウツギ	トロロ
ハナイカダ	ナキナ
ヒイラギ	メッキバラ
ヒサカキ	ビシャコ
ヒメシャラ	エンコ
フサザクラ	タニガシ
ミカエリソウ	トチシバ
ムクロジ	ムクリョウ
メギ	トリトマラズ
ヤハズアジサイ	キュウリバ
ヤマグルマ	トリモチノキ
リョウブ	リョウボ

▲ 植物標準和名と川上村の呼び名の比較

▲ ナキナ

▲ フクランショウ

▲ ノブ（ゲタギ）

▲ フシノキ

川上村見聞録⑪

＊このコーナーでは、民俗担当の黄瀬桂子が村で見たこと聞いたことを「川上村見聞録」として紹介していきます。

「神之谷の民間信仰」

「朝拝式」が行われることで有名な金剛寺がある神之谷の集落には、山腹の金剛寺を間に挟んで上下に、川べりの舞場垣内と山間の戻木垣内の2つの垣内がある。舞場は、吉野川から金剛寺にかけて広がる垣内で、柏木集落を通る国道169号から細い吊り橋を渡って行く。戻木は、金剛寺を通り越し、更に山道を登った斜面に位置する垣内で、日当たりの良い宅地が広がる。

神之谷は、集落の起源を「後南朝」の歴史と結び付けて語られることが多く、もともとは北股と三之公にわかれて住んでいた先祖らが、氏神神社（清谷神社）近辺の清水平と、尾根を挟んだ東谷という地所に出てきて分かれ住み、それがやがて現在の舞場と戻木に下ってきたものだと伝わっている。「舞場で舞って、戻木に戻った」ことが現在の垣内名の由来であると伝わる。

▲ 東谷の江戸時代（宝暦年間）の墓石

かつて神之谷は、祭りともなると50人ほどが集まる賑やかな集落で、往時について古老は「金剛寺の境内でわきあいあいと運動会もしたよ。ほんでも、走ったら境内狭もて（遠心力で）よう回りきらんでなぁ。競争やのに、追い抜きもできんだ」と楽しい思い出を語ってくれるが、現在住んでおられるのは、舞場に8軒、戻木に2軒のみで、高齢者ばかりになっている。

住人が少なくなるにつれて、かつて信仰されていた道端のお地蔵さんや神さんも、次第にその伝承を失いつつある。

▲ 大峰山脈を望む戻木垣内

東谷におわす奥ゆかしいお名前の「かくれ地蔵さん」は、いまではその由来が聞けなくなっている。東谷には、屋敷跡の石垣や江戸時代（宝暦年間）の墓石が現存するので、先祖らが住んでいた頃に祀られていたお地蔵さんであろうか。

「なんで、かくれ地蔵さんという不思議なお名前なんか、どんなご利益があるんかも分からんけど、あんまりもったいない（畏れ多い）というので、祠をこしらえた」という。一時は有志が月1回誘い合ってお参りしていたが、高齢のため再びここ数年お参りが途絶えがちである。

またもう一体、謎めいたお地蔵さんがおわす。清谷神社の辺りから山腹を登ったところに古道があり、そこに「土塗り地蔵さん」があるという。雨乞いの地蔵さんで、日照り続きのときに地蔵さんに土を塗って祈ると、雨が降るという伝承が伝わっている。村内の他の集落では、雨乞い地蔵の伝承は未だ聞かれず、その意味でも貴重な伝承を持つお地蔵さんである。ただ、舞場の古老が若い頃に見聞きされた伝承で、古道も通らなくなったので今もあるかどうか不明だという。

▲ かくれ地蔵さん

神之谷には他にも、亡くなった子供の慰霊とも、木馬曳きの仕事師の慰霊とも言われる赤子淵のお地蔵さんや、生き仏になった僧の伝承をもつ「首から上の病気に効く」という戻木のデンガンさんがある。

あちこちに集落を見守る地蔵さんがおわす神之谷。過疎・高齢化が進む中、集落の行く末をそっと祈らずにはおれない。調査・記録が急がれる。

▲ デンガンさん

＊『村の生活史』（昭和45年 県教委編）では、かくれ地蔵さんのご利益を、首から上の病気に効くとしているが、それは戻木のデンガンさん（レンゲさん、善願さん）の誤りである。